

図書館だより

居場所としての図書館

図書館長 村田 和穂

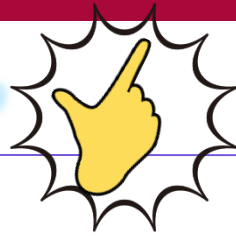


大学院の修士課程をどうにか終えた時、26歳になっていた。まだ若者のはずなのに、心は老人のようだった。就職を当てにしていた学校から（散々待たされた挙句）断られ、非常勤講師の口もなく、4月1日の身分は「無職」であった。世間は春爛漫、体はどこも悪くないのに、何もすることがないのは辛いものである。3月末から家に引きこもり鬱々としていたある日（4月10日頃？）、大学関係者から「熊本県のある高校が非常勤講師を急募している」という話をいただき、飛びついた。少し前向きになれたのか、週2日しかも午前中のみ、という短い勤務時間以外を有意義に過ごしたい、という希望が生まれた。まず、まったく新しいテーマで論文を書こう、と思い立った。次に、大学院時代の運動不足を解消したいのか、それとも、やり場のない鬱憤を発散したいのか（多分後者だろう）、無性に体を動かしたかった。ただ、卒業した大学の図書館や施設だけは利用したくなかった。知人（特に部活の後輩）から「今何をやってるんですか」と訊かれるのが怖かったのだ。そこで目をつけたのが熊本県立図書館（熊本市中央区出水）。ここは熊本市総合体育館が隣接しているのが魅力だ。休館日以外の平日は必ずこの2つの「館」に通うことになった。まず、体育館のプールでくたくたになるまで泳ぎ、その後、図書館に移動して、1階の視聴覚室のソファに身を沈め、リクエストしたクラシック音楽のCDをヘッドホンで聴きながら寛ぎのひと時を過ごす。心身ともにリフレッシュしたところで、2階か3階の閲覧室に移動し、論文を書いたり、それとは全く関係のない本を読んだりした。当初は予期していなかったが、これは一年を通してのルーティンとなった。

今回紹介する『アンナ・カレーニナ』（トルストイ作 北御門二郎訳）は、この時期に図書館から借りて読み上げた思い出深い本である。高校時代に、国語の先生（「図書館だより」12号で紹介した先生とは別人）が授業の合間に「最近出た北御門訳のトルストイは、ほかの訳と読み比べてみても、断然すばらしい」とおっしゃった言葉が耳に残っていた。大学生になったらすぐに読もうと思っていたのだが、大学時代はあまり本を読まず、この時期になってしまった。それにしても、なんという小説なのだろう。作者の深い人間洞察に裏付けられた個性豊かな登場人物たちの造形、主人公の愛と苦悩を意識の深層まで掘り下げる緻密な心理描写、多種多様な場面やエピソードをタペストリーの模様さながらに配置する物語の絶妙な構成など、長所を挙げ始めたら切りがない。『アンナ・カレーニナ』は「不倫」という社会的タブーを正面切って扱いながらも、通俗に堕することなく、極めて高度な芸術作品に昇華している。この作品を読んだ後では、これまでに読んだ全ての小説が幼稚に思えた。この本の下巻を読んでいた冬のある日、冷え冷えとした体育館内のベンチに腰掛け、震える手でページをめくっていた記憶は今なお鮮明だ。震えていたのは寒さのためだけではないことは自分でもわかっていた。

翌年の1月、ある学校が英語教員を募集しているという情報を耳にし、履歴書を送り、今度はどういうわけか採用された。その学校は有明高専。あれからはや30年が経つ。図書館でせっせと書いていた「まったく新しいテーマ」の小論文は後の博士論文に発展した。不毛の一年と思われた1992年は、振り返れば豊饒の日々であった。収入はごくわずかだったが、体力と気力は甦（よみがえ）った。こうして私が再生したのも、熊本県立図書館が物理的にも精神的にも居場所であってくれたおかげなのである。

私のイチオシ



環境・エネルギー工学系

応用化学/環境生命コース 石川 元人 先生



1. 『自然が作る不思議なパターン』

(フィリップ・ポール 著)

2. 『物理の眼で見る生き物の世界

ーバイオミメティックス皆伝ー』 (望月 修 著)

皆さんは小さい子供に「理科は何を勉強するの？」と尋ねられたら、納得のいく答えを準備できるでしょうか。何を学ぼうとしているのか、何のために勉強しているのかを悩みながら学校生活を送り、やがて卒業して社会人になる前に、1人1人がこの疑問の答えを見つけ欲しいところです。例えば、私たちを取り囲む自然界に生じる諸々の現象の奥に共通して存在する法則を観察や実験によって追求する学問が物理や化学であり、見つけ出した成果を知識とし、技術の発展に反映させることが理科を学ぶ意義の一つである、という解答がありえるでしょう。理学と実学、という言葉で聞いたことがあるかもしれません。

複雑怪奇、豊穡な自然界を解きほぐして、単純なルールを見つけ出し、秩序を見つける達成感は、時代を問わず科学を仕事とする人たちの醍醐味です。そもそも、人間には古い時代から自然を観察し、本質を見ぬこうとする知識欲があるようです。例えば、縄文土器に見られる模様（これを縄文文様といいます）には波紋の連続や三角の繰り返しなどがあるのを皆さんもご存知ですね。宗教的な願いは別として、自然に潜むパターンを認識し、抽象化する営みを先祖代々続けている点に驚いた経験が誰しもあるかと思います。ちなみに、縁起の良い模様として知られる青海波は某、鬼退治アニメの着物でもお馴染みかと思います。これは、無限に広がる波のように幸せが続きますように、との意味が込められているそうです。三角形の繰り返しパターンは鱗を意味し、再生の象徴として用いられてきたパターンです。前置きが長くなりましたが、今回はそんな自然界の「かたち」と形の持つ「機能」の世界の一端に触れることができる契機となる本を1冊、そしてもう一歩先へ、物理法則で自然界の不思議を物づくりの世界へ活かす「バイオミメティックス」に関する本の二冊を順番に紹介したいと思います。

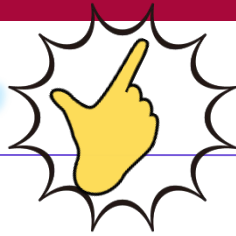
1冊目に、『自然が作る不思議なパターン～なぜ銀河系とカタツムリは同じかたちなのか～（原題 PATTERNS IN NATURE, Why the natural world looks the way it does）』（フィリップ・ポール著、日経ナショナルジオグラフィック社、2016年）をとりあげます。洋画を日本に持ち込む際の過剰な翻訳（意訳？）が少々、引っかけられますが中身はとても楽しいビジュアル図鑑です。ちなみに、私の今のブームは「フラクタル」です。毎朝、出勤しながら空に浮かぶ雲をながめては、目には見えないけれどフラクタルが身近にあることを感じる次第です。河川の広がり方や道路網、樹形状の神経細胞の形も身近なフラクタルですね。どんなかたちで、どんな機能をもつ図形なのか、図鑑を開いて見てくれると幸いです。



2冊目は図鑑よりも少しオカタイ、『物理の眼で見る生き物の世界ーバイオミメティックス皆伝ー』（望月 修著、コロナ社、2016年）です。おそらく、エネルギーコースや建築コースの人にも面白い内容ではないかと思います。生物の機械的運動、環境に適応する機能と形態、さらには擬態や視覚効果について、モデル化を行い、物理的・工学的に考えた成果が平易な言葉で書かれています。本を読みながら、生物がこうやって動くのか、こんな巧みな技を使うのか良いった驚きを再発見し、皆さんの青春の肥しとなれば幸いです。



私のイチオシ



図書館運営室・室員

田中 彰則（一般教育科）

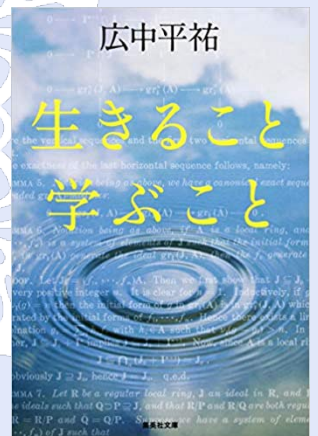


1. 『生きること学ぶこと』（広中 平祐 著）
2. 『泥棒っ子』（川竹 嵯峨夫 著）

小学校へは約2kmの道のりを30分程かけて通った。区画整備のされていない歪な形の田と田の間にある曲がりくねった畦道をぬけて川の土手へと上がり川の流れを横目に歩いた。夏には、未舗装の道の両端から伸びた草をかき分けながら歩き、時折あらわれるヘビに怯えながら通っていたことを覚えている。集団で一列に並んで登校、帰りは、近所に同じ年代の子どもがいなかったので一人で帰ることも多かった。家に着いても近所に友人がいないので、本をよく読むようになった。図書館から色々な分野の本を借りて読んでいたが、その中でとてつもなく印象に残っている本が一冊ある。それが『泥棒っ子』（川竹嵯峨夫著、偕成社）。私の住んでいた所とどこことなく似た雰囲気のある高知県の自然豊かな村で、自分達だけで暮らす3人の子ども達、喜作、政二、丸美の生活を次男政二の目を通して描かれた物語だ。題から子ども達だけで暮らしている理由が推測できると思うが、長男の喜作は村役場から援助を受けることを拒み、再び親子で生活することを目指して弟妹を支える。喜作自身まだ中学生であるが、新聞配達をしたり畑で作った新鮮な野菜を町で売ったりして生活費を稼ぎ、時には厳しく叱りながらも懸命に弟妹を世話する。子どもだけの生活は過酷だ。でもこの家族を羨ましいと思っていた。それは喜作兄さんの限りない優しさから来るものだった。政二を中心として巻き起こる出来事を描いた作品だが、私は喜作兄さんに出会えることを楽しみにして何度もこの本を借りて読んだ。優しくあるためには賢く、強く、我慢ができなければならないということを、小学生の私は喜作兄さんから学んだ。「最も尊敬する人は？」と聞かれれば、今でも喜作さんと答える。残念ながら絶版であり有明高専の図書館にも所蔵していない。別の図書館から借りて読むことができるので機会があるときに手に取ってもらえたらと思う。

喜作兄さんという目指すべき人がいたにもかかわらず、中学に入学した私は少しばかり横着になってしまった。実際、中学1・2年の頃の記憶はほとんどない。一体、何をしていたのだろうと思う。ところが、あるきっかけがあって、中学3年生の夏頃からまた沢山の本を読むようになった（この頃からの記憶はきちんと残っている）。大学受験の勉強を本格的に始めた高校3年の夏頃まで、暇さえあれば本を読んでいた。今持っている一般教養的知識のほとんどはこの頃に手に入れたような気がする。そんな中で偶然出会った本が広中平祐著『生きること 学ぶこと』（集英社）である。数学界の最高峰の一つであるフィールズ賞を受賞した著者が（ちなみに、日本人のフィールズ受賞者は小平邦彦（1954年）、広中平祐（1970年）、森重文（1990年）の3人）、50歳代になり、若者に向けて自身の人生・学問論を語っている。誰しも一度は「何のために学んでいるの？」と自問するだろう。答え無き問であるが、一流の成果を残した数学者の経験と考えもまた参考になるのではないだろうか。著者は数学の世界で常に成功しながら生きてきたわけではない。どのような経験を通してフィールズ賞に結びつく結果が得られたのかを知るだけでも読んでいて楽しい。本の「あとがき」を書いているのは小沢征爾であり、数学界と音楽界の巨人の交流を知るのもまた面白い。

自分について考えると、何かを学ぶ主な理由は、今まで知らなかったことを知ることが楽しいから、そして、学んだ先に誰も知らなかった新しいことを幸運にも見つけることができたなら嬉しいから。単に人生を楽しみたいし、時には喜びたいから学んでいるだけなのだなと思う。気がつけば、私も50歳を過ぎてしまっている。喜作さんにはまだまだ及ばないから努力したいと思う。それに、もしかしたら、自分の人生を豊かにしてくれる新しい発見ができるかもしれない。学び続けよう。



専攻科生より本科生に薦める1冊の本



『なぜ銅の剣までしか売らないんですか?』
エフ 著



71
田口 璃音



『英語とわたし』
岩波新書編集部 編



6C
平川 琉偉

この本の舞台は、中世風ファンタジー世界となっています。有名なRPGゲームなどでよく見る、選定された勇者が魔王討伐のために冒険するといった世界です。ただこの本での主人公は勇者や魔王ではなく、勇者として選ばれた人物の兄にあたる商人見習いが主人公となります。勇者たちが最初に立ち寄る村で、最良の武器などではなく銅の剣までしか販売しないシステムに対して疑問を抱いてしまった主人公は、自身の弟が魔王討伐のための勇者に選定されたことをきっかけにこのシステムを是正しようとしします。そして、主人公は商人ギルドを目指して旅をするうちに、世界の真の仕組みと為政者の意図に迫っていくと言った内容です。

基本的には、頭のいい主人公が淡々と物語を勧めていくので、読む人によっては単調に感じてしまうかもしれません。しかし、RPGゲームとしては、当たり前となっている設定を中世ファンタジー世界に落とし込み、主人公が抱く疑問点を大きな矛盾点もなく結論を出している点は非常に面白いです。さらに、複雑な表現などは非常に少ないので普段読書をあまりしない人にとって、読みやすい作品になるのではないかと感じます。

また、この作品では、ビジネスについて（ファンタジー世界で例える形にはなりますが）触れられています。そのうえ、現代のビジネスの技能や文化を理解しやすいように書かれていますので、「ビジネスについて興味はあるけど、専門書を買う気(読む気)にはなれない」といった人が読んでみるのもおすすめです。

「あなたにとって英語とは」この本は各界で活躍する20人余りの方にこの質問をし、それぞれの体験的英語論をその答えとしてまとめた本です。

高専生のみなさんは英語をどのようにお考えでしょうか。「必修単位だから単位をとるために最低限勉強している」、「話せるようになりたいくて勉強中」、「自身のスキルとして高いTOEICスコアを持っておくため勉強中」など色々な考え方があると思います。

ここで世界に目を向けると、英語は現在世界で最も話者が多い言語である上、ビジネス、旅行、インターネット上の情報、研究論文など、英語を使用しなければならない場面は増える一方です。しかし英語を習得するには、学校で開講されている授業のみでは足りません。そのため自主学習が必須となるのですが、その学習方法が分からずに悩む人も多いと思います。私もその一人でした。英語への触れ方が分からないのです。

この本には英語を使用して働いている、活動している日本人の方々がどのような学習方法で、どのような経験を経て習得したのかが記してあります。英語への触れ方が分からない私たちは、まずこの本のような、成功者の体験談がまとめてある本を通して、英語の学習方法を確認することが英語習得までの近道になると私は思います。成功者の真似をするのが早いとはい切れませんが、21人もの成功者の体験談の中には、あなたの感性に合う、あなたの英語学習に大きな影響を与える言葉がたくさんあるかと思っています。将来的な英語習得を目指し、その学習方法に迷う学生にはぜひ読んでいただきたい一冊です。





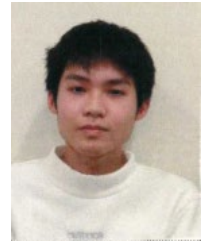
『スモールワールズ』
一穂 ミチ 著



6A
田原 慎太郎



『ジョン、全裸連盟へ行く』
北原 尚彦 著



6I
山本 裕季

私が本科生に薦める1冊の本は、一穂ミチさんの「スモールワールズ」である。まず、私がこの本を手にとってみた理由は、表紙が気に入ったからだ。こんな単純な理由で出会ったこの本だが、読んでみるとページをめくる手は止まらず最後まで一気に読みしてしまった。

「スモールワールズ」は6つの短編からなる短編集だ。作品はそれぞれ家族をテーマにしているが、テイストはどれも違っている。笑いあり感動ありホラーまで、バリエーション豊かで楽しむことができる短編集である。

以下、各話あらすじ（公式ホームページより引用）

・ネオンテトラ

夫との関係に鬱々としていた美和は、ある夜、一人の中学生男子と出会う。水槽の中で泳ぐペットの熱帯魚と孤独な少年を重ねながら、二人の逢瀬は続けられ……。

・魔王の帰還

鉄二の平和な高校生活はある朝くずされた。泣く子も黙る恐ろしい姉ちゃんが出戻ってきたのだ。傍若無人でめちゃくちゃな姉だが、その裏には悲しい理由がありそうで……。

・ピクニック

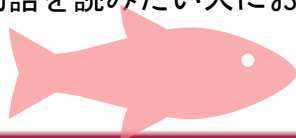
生後十カ月の女兒が不慮の死を遂げた。幸せな家族に向けられる恐ろしい疑惑——赤ちゃんを殺したのは身内ではないのか。衝撃のラストが待ち受けるミステリー。

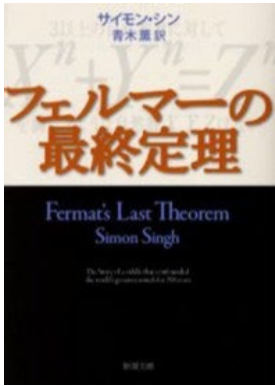
他にも「花うた」、「愛を適量」、「式日」の作品が入っている。文体や物語の構造はそれぞれ違うが、どれも途中で驚くべきストーリーの展開がある。ぞっとするようなこともあれば、思わず感動してしまうような展開まで様々だ。しかし、どれも「人生は思い通りにいかないが、それでも続く」という事実を突きつけてくる。安直なハッピーエンドでは終わらない、罪を犯した人のリアルな物語を読みみたい人にお薦めの一冊だ。

皆さんは「シャーロック・ホームズ」をご存じでしょうか？19世紀後半のイギリスを舞台に、コンサルティング探偵であるシャーロック・ホームズが、相棒のジョン・H・ワトソン博士とともに、数々の事件を解決していく推理小説です。今回紹介する「ジョン、全裸連盟へ行く」は、舞台を現代のイギリスに移した、ホームズ・パステイシュー短篇集となっています。30～50ページ程のお話が6つ載っており、空いた時間に気軽に読むことができます。

私がこの本の中で特に好きな話は、タイトルにもなっている「ジョン、全裸連盟へ行く」です。裸で過ごすことにこだわりのある依頼人から相談された、秘密クラブ『全裸連盟』から退会通知を受けた原因を調べてほしい、という依頼に興味を持ったシャーロックは「頼んだぞ、ジョン」と、ジョンにとある頼みごとをします。・・・依頼人が来る前のシャーロックとジョンの会話から、推理を経て話のオチまでの流れが綺麗にまとまっており、とても面白かったです。

他にも、不思議な依頼人や想像もつかないような結末が待っており、楽しく読破できると思います。ジョンがシャーロックとの会話の中できらかわれるシーンや、ジョンがシャーロックに言いくるめられて良いように使われるシーンが個人的には好きです。また、依頼人が来る前のやり取りやタイトルなど、原作を元ネタに使用している部分もあるため、原作を読んだことのある方は、また違った楽しみ方もできるかもしれません。この本は、図書館に入って右奥の、学習閲覧室の文庫コーナーにあるます。ラベルは、「文庫/Ha/JA1168」です。興味を持った方は、ぜひ一度手に取って読んでみてください。





『フェルマーの最終定理』
シン、サイモン 著



6E
下田 匠海



『ハーモニー』
伊藤 計劃 著



7C
西山 裕貴

「私は真に驚くべき証明を見つけたが、それを書くには余白が狭すぎる」という言葉を聞いたことがあるだろうか。この言葉は題名にもなっているフェルマーの最終定理の紹介とともに添えられたものである。この問題は三平方の定理を進化させたものであり、中学生でも理解できる問題である。にもかかわらずプロの数学者たちが証明するまでに300年以上かかった超難問なのである。フェルマーの最終定理の研究を行ったことで何も成果を出せず、積み上げられるはずのキャリアを捨てた研究者もたくさんいる。この問題は1995年にアンドリュー・ワイルズにより証明された。

この本ではこの問題の数学的な解説よりもその300年間の研究の道のりが主に描かれている。そのためこの本は歴史書や人間ドラマを描いた本なのである。そこにはガウスやオイラーなどの一度は聞いたことがあるであろう数学者の功績や、あまり知られていない日本人の活躍、この時代では珍しい女性数学者の活躍も描かれている。そして証明の立役者であるワイルズのこの問題に運命的に出会い、どのような研究者生活を送ってきたかが描かれている。

高専生は4、5年生で研究を行う。実験とは違い、結果がわかっていないことを模索しながら進めていく必要がある。本文中の「長時間とてつもない集中力で問題に向かい合い、集中が解けたふとりリラックスした瞬間に新しいアイデアが浮かぶ」という言葉がワイルズから語られている。研究はどうにもうまくいかないことがあるが、フェルマーの最終定理に挑んでいった数学者たちのように諦めずに取り組んでほしい。研究に対する熱を呼び起こしてくれるような特に高専の5年生におすすめの一冊である。

私がおすすめる1冊は伊藤計劃著「ハーモニー」です。本書の作者である伊藤計劃氏は2007年にSF小説「虐殺器官」でデビュー、今回紹介する「ハーモニー」がオリジナル長編2作目の作品です。そのほかにもいくつかの短編も執筆されていますが、いずれの作品でも読者を引き込む世界観で次々に読み進めたいくなります。ハーモニーの世界観は簡単にいうと「誰もが病気で死ぬことがなくなった世界」「みんながみんなに優しい世界」です。以下、簡単なあらすじを紹介します。

21世紀後半〈大災禍(ザ・メイルストロム)〉とよばれる大暴動の末に世界各地で核兵器が使われる大混乱が起きました。そんな時代を経て人類は構成員の健康を第一とする社会を作り上げ、医療分子と管理された生活習慣によって誰もが病気にならない、お互いのことを気遣いあうようになりました。そんな社会が嫌になった3人の少女は死を選ぶことで逃げ出そうとしました。それから13年後、死ねなかった少女である霧慧トアンは世界を巻き込んだ大混乱の陰にかつて死んだはずの友人の気配を感じ…。

少女たちはなぜ死を選んだのか、そしてその出来事が世界を巻き込む大混乱にどうつながるのか、そしてタイトルの「ハーモニー」の指すものは一体何なのかということが主人公である霧慧トアンの一人称視点で臨場感たっぷりに話が進んでいきます。また、ネタバレになるので詳しくは言えませんが1度目に読んだ時と2度目以降に読む時では同じ内容なのに全く違う作品のように感じる仕掛けがあり、何度読んでも楽しめる作品となっています。ぜひ読んでみてください。そして、1度だけでなく2度以上読んでいただくと作品の真の面白さを感じることができるでしょう。



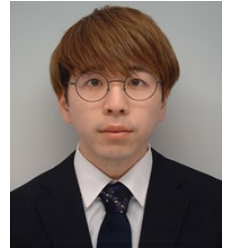
『六人の嘘つきな大学生』
浅倉 秋成 著



7E
牛川 和哉



『アルジャーノンに花束を』
キイス、ダニエル 著
小尾 英佐 訳



7A
大村 龍平

応募者5000人、新進気鋭のIT企業の最終選考に残った6人の大学生。入社できれば初任給50万円が約束され、華やかなオフィスに座る社員の一員となることできる。その最終選考で課せられた課題は、「入社するのに誰が最も相応しいのか、6人で話し合って1人を決めろ」というものである。密室の会議室で6人は決めあぐねている中、封筒があることに気づく。その封筒には6通の密告書が封入されており、6人が犯した過去の過ちが書かれていたのだ。彼らは疑心暗鬼になり、お互いを詰り、謗り、嘲罵し、糾弾し、仲間だった彼らの絆は崩れていく。。。

時は流れ数年後、6人のうちの1人が病死したのを契機に、ある1人が封筒を持ち込んだ犯人を捜し始める。当時の彼らに対してインタビューを実施し、その結果犯人に辿り着く。犯人の神算鬼謀とその目的を知ったとき、正義とは何か考えさせられるだろう。

この物語は、新卒の就職活動で用いられるグループディスカッションを題材にしている。グループディスカッションとはある議題について話し合う、複数人での討論会である。意見を収斂させる過程を見て、各人のコミュニケーション能力や論理的思考力をはかり、採用における判断材料の一つとしている。私はグループディスカッションが不得手であり苦い思い出しかない。そんなグループディスカッションを題材にしており、かつ犯人の思想に共感できる部分があったため、私には逃れ向きの本だった。グループディスカッションで過去を暴露しあう中分かる登場人物の過ちの内容を知って、悪い印象を持ってしまうかもしれないが、読み進めていくにつれて彼らの印象が二転三転し、読破後は溜飲が下がるだろう。就職活動を終えた方々には共感できると思うため、是非読んでみてはいかがだろうか。

番組名の響きに惹かれた中学3年生の春、私はベット・ミドラーさんの『ローズ』をバックミュージックに本作のタイトル冠したドラマを観ていました。花屋で働く知的障害を持つ主人公が、知能を飛躍的に向上させる臨床試験の被験者となり、実験による知能向上が成功した白ネズミのアルジャーノンと共に研究を行いながら、人としての“普通”を獲得していく物語でした。私は当時、未熟ながらもその内容に心惹かれ、衝撃を受けたことを覚えています。今思えば、その衝撃は過去に観たドラマの中でも一二を争う名作です。

こうしてドラマに感銘を受けた私は原作の方が気になり、中学校の図書室から本作を借りて読み始めました。私はさらに大きな衝撃を受けました。物語の表現方法がそれまでに読んできた小説とは掛け離れたものだったのです。

物語は、主人公であるチャーリー・ゴードン自身による「経過報告」が一人称で綴られています。序盤は幼児が書いたような間違いだらけの文章で、ごく簡単な言葉や単純な視点でのみ、彼の周囲の事柄が描かれていきます。やがて知能向上の臨床試験によるチャーリーの知能の上昇に伴い、文章のスタイルは高度で複雑なものへと変わっていき、思考の対象もより抽象的で複雑な内面の描写へと変化していくというものです。

主人公の知性に合わせて綴られる文章の在り方が変化していく様を読みながら私は、こんなズルい書き方があるのか、とページを捲る手が止まりませんでした。

言うまでもなくストーリーも素敵で、主人公チャーリーの心象の変化はとても純粋なもので、儚ささえ感じます。私が言うのも烏滸がましいですが、感動せずにはいられない、そんな作品です。本作はもちろんのこと、ドラマも一緒に楽しんでいただけたらと思います。

ついしん。もしあなたがこの本を手にとるならど一かさいごの1文字まで読んでください。



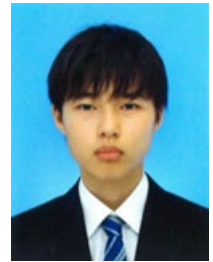
『岸辺露伴は叫ばない』
維羽 裕介ほか 著



61
小原 悠聖



『ボッコちゃん』
星新一 著



7M
竹下 旺希

私が勧める本は「岸辺露伴は叫ばない」です。この本は「ジョジョの奇妙な冒険 第4辺」のキャラクターで、人気漫画家である岸辺露伴の спинオフ短編集となっています。この本の主な内容は、岸辺露伴が面白い漫画を描くためには手段を選ばず、リアリティを追求し続け数々の奇妙な出来事に遭遇する物語となっています。今回は5作品の短編集の中から一つを、簡単に紹介します。

その作品は、「血葉塗」です。

河豚には毒があるが、それでも食してしまう人間の好奇心をリアルに漫画を描きたい岸辺露伴が、市立図書館に資料を探しにきました。以前より、利用者が減っていることに気が付いた露伴は、受付カウンターの司書に、理由を尋ねました。利用者が減った原因は、この市立図書館の本に挟まっている真っ赤の葉を見つけると不幸になるという噂があるせいでした。露伴は、本当の話なら漫画のネタになると考えて、葉を探しました。館内を探していると、キッズコーナーで探していた河豚の本を見つけました。その本を読んでいる途中、くっついていてページがあり、露伴をこのページを無理やり開き、見つけてはいけない真っ赤な葉を発見しました。ここから、露伴は不幸が連続して起こります。この葉は想像以上にまずい代物であり、生半可な好奇心で触れてはいけなかったと後悔します。司書に葉を見つけた人がどうなるのかを聞くと、司書の雰囲気ガラッと変わりました。司書は「私は、好奇心の赴くまま、人の興味が至る果て全てを知り尽くしました。葉は、そこで読むのを止めた印であり、赤色は警告を意味します。それ以上進むなって」と言いました。司書はなぜか真っ赤な葉を持っており、追い詰められた漫画家がどうなるのかを知りたい新たな好奇心で露伴を追い詰めてきます。

さて、この後、岸辺露伴はどうなるのかを気になる人は、ぜひ手に取り読んでみて下さい。

こんにちは 私がおすすめする本は、星新一著「ボッコちゃん」です。短編SF小説、ショートショート集です。1話4～7ページで完結する50個のお話が載せられています。この本に載っているいくつかの話を紹介します。

「おーい でてこーい」

ある日、村はずれの小さな社で、小さな穴が見つかった。覗いてみるととても深い穴に感じられた。ある若者が穴に向かって「おーい でてこーい」と叫ぶも、何の反響もない。ものすごく深い穴があると話題になり、新聞記者が取材にやってきた。学者が高性能な拡声器を持ってきて反響を調べても底が分からない。落ちたら危険だ。しかし大量の土で埋めようにもお金がかかる。ならばと、都市部で出た大量のごみを穴に投げ入れるようになって…

「生活維持省」

とても平和な世界だった。国民一人当たりには十分な広さの土地が確保され、働かずに欲しいものが手に入れられる社会、人々は読書や園芸、音楽など好きなことをして暮らしていた。犯罪もなく、病気もすぐに治すことができた。しかし生活維持省では、国民の暮らしを維持するための仕事をしなければならない。それは人が増えすぎないように、「間引き」をすることだった。

このほか「殺し屋ですよ」や「猫と鼠」という話も面白いです。ぜひ本で確かめてみてください。この本は、短い中でも予想がつかない展開、そしてあっと驚く結末が待っています。中には皮肉が効いた話、教訓めいた話もあり考えさせられます。

(欲にかられた登場人物たちに待ち受けるひどい結末や、自分では大真面目に行動しているつもりでも、他人からみたら滑稽に見えるという話など)

一方で切ないラストを迎える話もあり、読み進めるのに退屈することがありません。また一つ一つが短いお話なので、休み時間や通学途中に手軽に読むことができます。図書館に行った際は、ぜひ読んでみてください。



2023年有明高専美術ギャラリー作品介绍

絵画



『航路 (海の詩)』
奥苑 和司



『秋色』
藤吉 美保子



『老桜』
小柳 規久絵



『路のとう』
上村 恵子



『白い花』
木村 和子



『風になって』
岩本 久子



『崎津教会』
石井 保



『記憶』
横山 多佳枝



『暮色』
木戸 直道



『つばき』
牟田 英昭



『チマチョゴリの少女』
永井 正文



『ドナウベントの午後』
松尾 正勝



『春』
牟田 志津子



『朝陽阿蘇』
加治屋 陸



『杵島岳を望む』
堤 和則



『狩人』
塚本 和美



『ハイビスカス』
田中 栄



『筑後の秋』
西川 正人



『風の音』
河島 房子



『宮島』
松尾 忠之



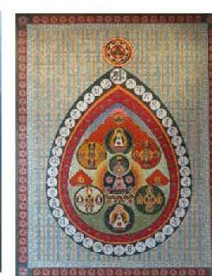
『椿の里』
黒田 満里子



清水
『黄山』
正敬



『消えゆく立抗』
寺田 晃洋



『曼陀羅』
皆島 万作

写真



『秋色』
田中 浩久



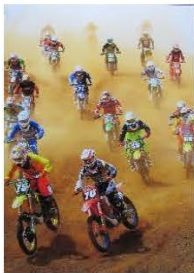
『モウちょっと』
浦田 碩也



『干潟の印象』
鈴木 安徳



『男の競演』
高口 博文



『激走』
今村 誠二



『千枚田(三重県)』
渡邊 精之



『ファンタジーの世界』
ふるいけ博文

書



『青淵の風』
小柳少鼎(和孝)



『無礙』
田河 琴翠



『輪廻』
川井 遥水



『比翼連理』
田中 碧光



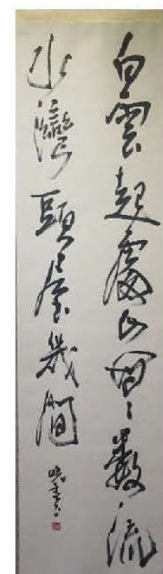
『色即是空』
山口 八石



『杏花(あんずのはな)』
温憲詩句
中本 管城



『芭蕉布』
山下溪泉(溪子)



『沙班詩』
高井良暁春

特設コーナー

2023年図書館の旅 (Library Odyssey 2023)

副館長 柳原 聖



優しい自然光が入る館内
1991年の建築。デザインは佐藤総合計画九州支所。
「福岡県建築住宅文化賞大賞」を受賞している。

新年あけてしまいました。相変わらずの愚図の大忙しのドタバタで、正月気分味わえず冬休みを終えました（涙目）。1回で終わるかと思ったこの特集でしたが（笑）、おかげさまで2回目となりました。今回はおひざ元の大牟田市立図書館です。

館長の乾 達（いぬい たつし）様からお話を伺いました。

—まずは概要を教えてください。

乾）大牟田市立図書館は昨年3月末時点で30万1231冊（本館24万2480冊に地区公民館図書室6館とあわせて）を蔵書しており、運営は私ども（株）図書館流通センター（TRC）が請け負っている図書館です。図書以外にも郷土資料や地方行政資料、音楽CD、DVDやビデオ等のAV資料を収集し提供しています。

—電子化によるネットサービスも開始されておられますね。コロナ禍にあって自宅から気軽にスマホだけでいろいろと書籍が読めると言って家族がすごく喜んでました。



郷土資料コーナー



有明高専スクラップファイルもあった。（元専攻科生の記事発見。横にいる若い先生は…（笑））

乾）電子図書館サービスは柳川市、みやま市、長洲町と共同でありあけ圏域電子図書館として提供しています。提供できる冊数は8900冊ですが今後充実させたいと思っています。それから三池炭鉱歴史資料デジタルアーカイブを始めました。私はこちらの館長として県外から赴任したのですが、驚いたことに三井鉱山五十年史稿など三池炭鉱に関する資料を探して全国各地の研究者から現在でも問い合わせがあるのです。そこでそれだけ利用があるのであれば電子化して広く研究などに役立てていただこうということになりました。

郷土資料についてはほかにも三池炭鉱関連企業の社内報から有明新報などの地方紙記事まで幅広く集める努力をしています。

科学教育にも力を入れていて、有明高専さんのご協力を得ながら理科読や科学広場inおおむたなども実施しました。

—読み聞かせの会などは他の図書館でもよく耳にしますが、そのような科学イベントも企画していらしたなどとは驚きました。

乾）私たちの現在の課題のひとつとして若い世代の図書館利用をいかに増やすかがあります。

たとえば大牟田市立図書館の昨年の貸し出し冊数は30万1千冊です。ほぼ蔵書数が貸し出されていることとなります。昨年の延べ利用者数は7万9000人でした。

特設コーナー

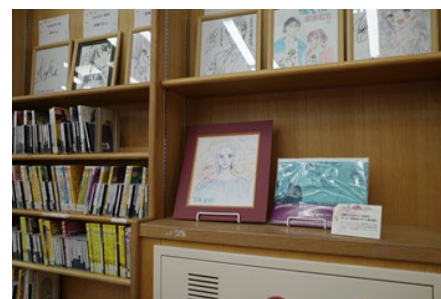
この利用者の年齢別内訳を調べると40～70歳代の世代が中心でした。ですのでイベントなどをきっかけに有明高専の学生さんにも気軽に足を運んで利用してもらえればと思っています。
※市立図書館は市民だけでなく、大牟田市に通学通勤している人にも利用証を発行しています。

一わが校の図書館には工学の専門書はあるにはあるのですが、研究のきっかけをつかむための便覧などの資料がかなり古かったり、分野が限られていたりします。そのようなこともあり私も有明高専着任当初はこちらの図書館をよく利用させていただいておりました。



各分野の便覧がそろえられたレファレンスコーナー。書架の脇に小机があるのが調べるのに便利

乾) 意外ですね。高専の図書館には新しいレファレンス資料がいっぱいあるのかと思っていました。便覧などのレファレンスコーナーもそうですが、書架を一覧すれば幅広い見解が存在することが分かるのも図書館の長所で、ぱっと棚を見たときにどのような本が並んでいるかでその分野の動向が俯瞰できたり、誰がその分野をリードしているのかを知ることができます。そして、あるトピックについて調べたいのだけれども、どのような本を見たらよいかわからないというようなことがあれば、その図書館の司書に相談してください。当館では私を含めて16人のスタッフがおりますが13人が司書の資格をもっています。



大牟田にゆかりのある漫画家の色紙著名なのは萩尾望都（はぎおもと）先生（萩尾町と関係あるのかしら？）と鴨川つばめ先生かな。カウンターで問い合わせすると萩尾先生の作品を貸し出してもらえます。

司書は利用者の調査を支援する役割もあります。利用者の皆さんから相談いただくことで、私たちも今のような話題について利用者が情報を探しているのかがわかりますし、そのことが勉強のきっかけにもなります。ひいては当館に不足している図書はどのようなものか？という目安にもなり図書整備の指針にもなるのです。

一なるほど、私たち教員も教えているようで学生からの質問によって、より深く担当科目について学びなおす相互啓発的作用があるのですが、それは図書館員の皆様にもあるのですね。本日はどうもありがとうございました。

乾) ええ、調べたいことがあれば気軽にお声掛けください。そして私たち図書館員を育ててください。



図書館前の映えスポットにてともだちびより像のキツネ君とオオカミ君とともに

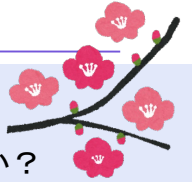
おじさん、ぼくたちの絵本を読んでないでしょ？
読んだほうがいいよ

100円あげるからともだちになってくれるかな？



※この像は大牟田市出身の絵本作家内田麟太郎さんの作品「おれたちともだち」シリーズを顕彰するために有志により寄贈されました。大牟田市動物園にはこのシリーズをモチーフとした「ともだちや絵本美術館」(<https://tomodachiya.jp/>)が2021年に開館されています。

私のイチオシ【番外編】



『モヤモヤそうだんクリニック』

（著者：池谷裕二（文） ヨシタケシンスケ（絵））

みなさんはなんだか“モヤモヤ”することはありますか？私はよくあります。些細なことで不安になったり、やらなければならないことがあっても、やる気にならずにただモヤモヤしたり。

この本では、小学生から集められた様々な疑問について、“脳のしくみ”とともに解決するためのヒントが紹介されています。こども向けの本ですが、大人も共感する疑問ばかりです。例えば、「ぼくの「やる気スイッチ」はどこにあるんでしょう？」、「やってきたことが身につくまでの時間ってどれくらいですか？」という疑問。みなさんはこのモヤモヤに向き合ったことはありますか？

池谷さん曰く「モヤモヤは生きている証し」（p184）。モヤモヤとともによい人生を送れるよう、高専生のみなさんにも手に取ってほしい一冊です。

『やけに植物に詳しい僕の街のスキマ植物図鑑』（著者：瀬尾 一樹）

小学生のころは、学校への行き帰りなどに雑草に触れる機会が多く、雑草で遊ぶこともありました。スギナがどこで切れているか当てっこをしたり、オオバコ相撲をしたり。でもいつの間にか、自分の世界は仕事やWEBコンテンツなど、いつも見るものばかりの狭い世界になってしまい、周りのことに気づく力がなくなっていたようです。

この本では、街に生きる雑草が沢山紹介されています。自分が知っている雑草を探してページをめくるだけでも、とても楽しいです。「この草はこんな名前なんだ！」とか、逆に気になる名前（例えば“ワルナスビ”）を見つけてどんな草か知りたくなることもあります。草の生態もとても面白いです。ホトケノザの花はどうしてあんな形をしているのか、

アリとの関係は？、ツユクサにはおしべが三つあるの？、猫じゃらしにはそんなに種類があるの？とか。雑草たちが繁殖するための工夫や物語は知らないことばかりで、その魅力に引き込まれます。

この本を読んで、「そういえば世界はこんなに広がった」と気付かせてもらいました。狭い世界からふと視線を外してみたら、世界にはまだ知らない沢山の魅力があふれているような気がしてきます。そして、観察するって素晴らしい。今ある科学技術も、すでに近くにあるメタバースの世界も、きっと先輩方が観察・発見したからこそ発展したのだろっかなあと思います。

観察の素晴らしさを感じる本といえば『ファーブル昆虫記』です。植物は菌や虫と関係が深いので、今度は虫の本をワクワクしながら読みたいと思います。

雑草の世界やふと目についた世界を少し観察してみると、もしかしたら、瀬尾さんやファーブル氏と同じように自分だけの出会いと発見があるのかもしれない。（図書係 八頭司）



編集後記

今回の「巻頭言」で触れた北御門 二郎(きたみかど じろう 1913-2004)さんをご存知ですか。北御門さんは熊本県生まれ、旧制五高(現・熊本大学)出身のトルストイ専門の翻訳家でした。学生時代にトルストイの平和思想に共鳴し、兵役を拒否。球磨郡水上村で農業を営み、文字通り「晴耕雨読」を実践しながら『アンナ・カレーニナ』のほか多くのトルストイの作品を翻訳しました。実は、北御門さん、有明高専を訪れているのです。『有明高専50年史』によると、昭和56年(1981年)の11月に、「己に克ちて礼に復る」という演題で講演されています。私と同じ年の高専1年生が、この講演を聞いたのかと思うととても羨ましい。もし、皆さんの中で、『アンナ』を読んで何か心に感じるものがあったら、是非とも北御門訳の『戦争と平和』(全3巻)にチャレンジしてください。更に深い感銘が得られることでしょう。また、トルストイにはこのような大長編だけでなく、短編にも優れた作品があります。長いのは苦手、という人は、まずは『イワンの馬鹿』と『人はなんで生きるか』(共に北御門訳あり)を読んでみてください。

最後に「居場所としての図書館」、私にはもう一つ「居場所」になってくれた図書館がイギリスにあります。これについてもいつか紹介できればと考えています。乞うご期待。(図書館長 村田)